

さすらいの旅路の果て

演歌の下りではない。気候システム研究センターの柏新キャンパス移転への道のりである。気候システム研究センター(CCSR)は1991年に創設され、2002年には第2期組織が発足した。91年春に赴任しての初仕事は、本郷キャンパス理学部7号館地下の一室に間借りするために、部屋に詰まったホコリをかぶった古い家具を移動することであった。学生もおらず、夕方になるとすることも無いので松野太郎センター長、住 正明教授、渡森 一事務主任とビールをよく飲んだものである。夏になると高橋正明助教授が赴任してきた。そのうちぼつぼつ大学院生が入り始める。そして、駒場IIキャンパス15号館への暫定的な引っ越し。私の父は書道家だったのでセンターの看板を書いて貰った。センター玄関わきに掛けてあった古ぼけた木の看板である。引っ越し打ち上げの夜から、さっそく学生が酔って和室のふすまを壊した。住センター長やみんなで輪になって気候モデリングの議論をけんけんがくがくやったものである。これらの学生も今は、それぞれの分野でリーダー的役割を果たし始めている。

あれから足かけ14年が立つ。はやいものである。この間、CCSR 大気大循環モデルと海洋大循環モデルが産声をあげた。現在、これらの資産は、CCSR/NIES/FRCGC-MIROC 等の気候モデル群の基礎になって、気候シミュレーションのために広く使われている。また、放射コード MSTRN、エアロゾル化学輸送モデル SPRINTARS、大気ガス化学輸送モデル CHASER、海洋・海氷モデル COCO、氷床力学モデル ICIES などが、教員と学生のコラボレーションによって作りだされてきた。これらのモデル群によって、人間活動が引き起こす気候・環境影響など様々なシミュレーションが日々の研究の中でできるようになった。さらに、気候データを利用した研究や、MIDORI-II や TRMM などの人工衛星データの解析結果も当センターから発信することができた。まさに、知識のつぼとしての大学のなかで、様々な知識が融合して気候モデリング研究が始まった揺籃期を含む14年であった。

そして今、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第4次報告書の作成、京都議定書の発足、国連環境計画の大気褐色雲(ABC)プログラムなどが開始され、気候と環境問題が社会的に注目されるなかで、気候モデリング研究がこれまでに無く重要になっている。その中で、RR2002 共生プロジェクトにおいて地球シミュレーターを使った温暖化実験の重要な成果が生み出されている。また、21世紀 COE プログラムにおいて古気候モデリングから新たな成果が得られ始めた。このように CCSR が関与している気候研究活動は、これまでに比べて質も量も格段に増大している。まさに気候モデリング研究は成長期に入ったと言える。しかしながら、私は、このようなエキサイティングな時代もいまだ気候と環境モデリング研究の黎明期だと思っている。超巨大なスーパーコンピューターの登場とも相まって、モデルは今後、さらに大きく発展してゆくだろう。同時に2004年に起こった大学法人化によって、CCSR と外部との関係も大きく変わってゆくと思われる。すなわち、より多くの研究協力によるモデル作り、より広範なユーザーによるモデル応用、そして民間との連携などにチャレンジしてゆかなければならない。

3月9日、CCSR は柏新キャンパスの総合研究棟に移転した。これから始まる気候モデリングの成熟期に向けて、教員、学生諸君、そして東京大学内外の関係者の間に新しいコラボレーションが生まれ、生き生きとした研究が新たに移転した柏キャンパスの地で、CCSR から発信されることを期待している。研究の旅路に終わりはない。

気候システム研究センター長
中島映至
2005年3月、柏キャンパスにて